特別
へ13
3468
1

門へ13
昭和二七年三月十八日購入

再栄花川譚

曲亭馬琴

叙

佐藤蔵

うれ世の物語よ。その名のみ耳ハ道つたく。
その変いとおびゝたるぞおほゝ。いでや紛水
乃なごれの里のゆゝ。蛍よ通ふ八橋よ。
二葉の松つが浅ゝらえふ。海苔ゞ嘉のこさゝと
ごゝろ。つゞゝあいせく隠家の。茂ゝ淋ゝ勇て
義あゝ。或ゝ梅堀の小ゝ家ゝ。懲ゝ悪

ふあるめ悪病を挾隈富次郎が廓の劇撃。
善悪もうるぬ多くの雑と。雑也が最期のうち
さうとう燈〻行灯燈の光やぐらに
ゆらゆらげ今ふと巻よ迷ふうちまうなり。

文化十三年丙子孟春

曲亭馬琴戯識

上巻目録

○ 第一編ハ隠家の茂兵衛が生育
附タリ 父の紀念ハ研滑〻と長船の業物
主の使令ハ蹴込る垣越の前髪
○ 第二編ハ佐野次郎左衛門が紀行
附タリ ちゝハ量らるめ蛸蛇の綱引
ゆくへハ定うなるめ若殿の道世

下巻目録

○ 第三編ハ芝崎の寺八と主従

第四編挾野次郎左衛門殺鰐圖

めう海の底了
八月十六日
三日乃月
法橋吾山

稲つま
周ち
り
名伝の
こ
さくま富次郎

第五編挾隈門聲手圖
傾城たそや

附り　さり迯されぬ惡の癖者
うち返し／＼されぬ碪の片袖
第四編ハ義女八橋う事　蹟
附り　妻の首級を祝言のさり肴
　　婚のく出る復讐の頭髻
第五編ハ誰也行燈の縁故
　　忠義ふめへなる歇どちの死出旅
附り　身方ふもとぶ婚縁のお國入

總目録畢

再栄花川譚卷之一

馬琴戲述

第一編ハ隠家の茂り栄ゆ生育

花ハさらふ。月ハ隅なれのことをうるれうへ塵も流さとゝ泉も涼／＼ゆ。ゆれの陰／＼どゝ松の操もうひなの／＼ん。されへ貪／＼なりて。後のこゝろ清く。紛ふ臨てめでゝ言の葉を選とまど。をべく五十年の非を贖ふふ足ぞう／＼。むゝ相州新井の城主三浦義同入道道寸の小扈從ゝ刃も。永正十五年七月十日。道寸父子滅亡のゝち。武義國ゝ戸のゝふ落ぐう。芝湾村の庁ゝふ幽ゝる擾／＼て。三十餘年浪人をゝ／＼し。

艱難いとべくもめぐざれど。二君ふつゝべとろひ定められぬ。見を
しも憂とせば親子四人尾羽うちゝて。妻ハこ年ゝ前ふ
世なさゝ。二人のゝ子どもをとゝごろふかうつれば。せめて
うれゝゞ生さえをゞ。かゝもて身を立させやとろひ。
浮雲の泡ときえゆ。二月のそゞめうこそ打ゆ
くるゞ。今ゝとやうゝくゝ。今茲十六年ありし
児ふ吉。十二年ありし女児八橋を枕ちゝ打さゝせ。息の
下ふえ口説くゝ。父ハ兄弟ハ父ゞ浪人して後ふ出生されば。
ふるえるすいよゝも辨ちゝざるべ。これもそのむゝ田津

造酒助德敦と名告うて。三浦陸奥入道義同ゝの家臣
ゝう。ふうゝふ主君滅亡のゝえへ。これいまゞ弱年ありしうと。
ふゝゝび仕官を願ゞて。既ふその志ハ致ゝう。されゞ父ふハ。
父ゞ志を嗣ゝ。生涯浪人せんもよゝ。これ後ハ兄弟よゝく
心を合せ。家を立家を興さゞ。縱命落ゝ運つゝるゝ。
民間ふ朽ゝうゝも。慾ふ惑ゝ人を寇。義ふ違て生を貪る
ことなれ。見ハ今般の紀念ゝて。二尺ゝ寸長紀近忠の一腰
を。去吉ふ与へつ。睡るゞゝ息絶ゝう。兄弟の子共ハ僅三年
の中ふ二親を喪ひゝゝゞ。ゝゝゝ悲ゝて。行せんとべも

田津七吉
獺師のこどを
こゝひ日ごふ
ちゝゝゝゝゝゝ
剣術を
まなびん
ゆを
のぞゝ
おりふ

ゝ元まへど。元来をるべき親屬もなくて。浅草川の猟師
茂三郎とつゝみの〳〵女房へ。彼あぢ外叔母なれば。茂三郎夫婦
芝湾村に居りて。後のなるどうりつとる。其吉八橋をいとゞ
家ふ引ゝうして養育せり。さる程ふ其士ふ。叔母の許ふ養ゝ
こゝへども。猟師の業まことろをこゝめど。只顧武家ふなまゝ
せんゝをねがふゆゝる。且暮のまゝとゝびふも。棒を使礫
を打。相撲をどゝるふ。力飽まで強〳〵して。ゆゝる浅草の
里人あも。彼ゝ相ゝふふゝ。宜なるゝ。後ふ隠家乃
茂三郎と名れて。當時第一の任侠と学えゝ。其士ふ

ゝふとめりゝる。其ふて。ふ安房の里見義弘の家臣ふ。
挾隈富之進範光とのふものふ雙ゝ剣術の達人ふて。捕まい
竹内の極意を受ゝこの外十文字長刀鎖鎌等有ゝ家〳〵
秘奥をこ究ゝ。ゝれども稟性柔和ゝ〳〵技ふ誇ゝる色
ふ同郡中挾野太郎左衛門とゝ。これを富之進とおゝ。
武藝をゝ〳〵高禄を賜ゝ。その技ふ長ふ芳〳〵
動もゝれば他門の弱人ふ侮ゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ
ふゝ〳〵これを憤り。而給富之進とゝ果て。この恨をゝ
ゝべ〳〵ゝどいとゝ〳〵ゝ。詈ゝゝをゝ

ゐるけらたつ。今茲正四歳の壯者なれども天性怜悧男子
まれにこれきのごくふ。ひ身い富之進どの官太夫
及の高弟ゆえ。彼人の吹挙ふ。家中の師範を辞
されりひゝるれば。挾隈の家ふ對して甲乙を爭んい
義理ふさぐり。ほさゝ今の富之進どのも武塾い却く
父ゆえも勝ものふをりゝそれども師弟の礼義を竭し
て敬ひやまるふこそ。忠義の二字ふたゝつぶ。
編執のこひを怪しゝ。昔のごく親く文の交へりと諫
ゝ。太夫たついよ〳〵焦燥骨肉同胞の怪ゝけれを疎て

富之進を。ゝ〳〵れを。り渠奴を打伏せどい他人乃
口を爭う塞ん。再び諍ひらむるすべ義絶とべとのひ
懲ゝ逐ふ一通の願書をそそまりて挾隈富之進と為合
仕つけゝきとすべ。主君義弘承引のゝく。
富之進太夫たつのあ師範。御弟ふかく為合ゝを
べたりを命ぜるる富之進いめへて勝負を好ざれども主
命踪止ゝるれべとないち太夫たつと立合て立地ふ打外
せるれべ義弘もゝ挾隈を賞美ゝひく。當ゆるふ
百五十貫文の加増をそ賜るる富之進いよろこびふ。

ゐる。信じたる。武州浅草の観世音ふ。繪馬を奉納せゞゝて。新ふ白木の櫃をもつゝ。木太刀二振を納せ。これを三尺のまりの額ふ飾つけて。從者二人ふ扛擔せ。人夫人を召倡して。浅草寺へ参る折も。廣沢村の田の畦。さのみ雨ふ樋の水溢れ一反ばかり間ふ。草履ふて渉べるもの〻ど。徒者もやゝとゝ〻ぬべ。本履ハ袴ふ弱ふ弱しおそれとゝ〻ゝ。袴のそで高つまし揚。この行潦を渉んとて。浩処ふ年紀十七八ばかりの壮者。馬ふ乃畔路ゝゝ来つ。この光景をゝるゝとゝ〻。おのもゝ

穿る本履を脱ゝ。富之進ふ前ふ跪ゝ。この道ふハ蛭多し。これをめさるべゝとゝ〻。彼本履をさし出せば。富之進ハ志辱しと回答して。本履を借りて穿。露ぐらも足を濡さゞゝてゝを越ふ。彼壮者裳引ゝげ向ふへゝゝ。又その本履を持ゝて。ゝゝ〻門人ふ貸ゝゝ。富之進も門人ふもその志の信ゝるをゝく。感じ。從者ふかとせる。錢一枚をゝせ〻ば。壮者押ゝ戻て見ゝ。さてやとゝ〻。志をもゝふ仰ゝれど。人の為ふ履を取ゝ。ゝゝ報をこゝんゝめ〻ど。願まゝゝせゝるふゝゝ。さハ

挾隈
富之進
浅艸
寺へ来
靖の
こちとゞ
去吉ゞ木履を
借て行潦と
そのこゝろざを
感じて武芸乃
指南せんと約を
納
天文三年
五月吉日

つゝがなくそだちしかバ。富之進ゆく〳〵願ひを行するぞ。身に
恩ぜし師のをしへはまぶりて得させべし。そのしやうとのべ。
壮者は少し身を届め。かくいはゞ嗚呼なる者とおぼされんが。
もとより元来武芸執心なりといへども。鑓のごとく此みちの
は草深き田舎にて。よるべき師匠もなく。日本にても憂思
ひしに。只今殿の仰せまへる絵馬をみるに。房州里見乃
家中挟限富之進範光敬白と記しあれば。同じく
既にその人なるをしられ。柳殿の武芸に勝とのたまへ。
近国にかくれなけれを。しかるを御合まゐらせしことぞ。思ひも

かけぬ幸なれ。是を三世の縁にして。お草履なりともとらん
つかへ殿さまがたの稽古のをり〳〵ハ又なれ又まねて太刀ねくるべ。
掃除のちりをも取るなるべ。此人の言葉にて高恩ふかく御家へ奉
公の屋敷なれど。大地にひれ伏し。ねんごろに富之進感心し。下邳乃
圯橋の側に致ふ。彼ハ日本の張良ならん。かゝるものに教ぞ弓矢
神の冥利に竭べし。汝父母ありや。年ハいくつぞ。名をも何といふと
問へバ名ハ長吉と呼れて十八才之。親とのハ往に身まかりて。
浅草川の上なる。叔母の許に養れ侍る。其よれ路の序
これらもわが本より。いひくまづ観世音に参詣し。それより

長吉ハ案内させて。猟師茂右衛門家ハ西ノ方ノ山ノ麓ニ
ぞ。うしろ。この壮者とうれハ得さるとのへ。茂右衛門夫婦縁由
を申のべおりあり。長吉ハそも猟師とあり果べ此のハ手。
別ハ力技をこめ。人ハ痩いけあどをもりさびぐるれ。
よりて合ねうとて簡し。さろを沿ゆして進ることへ
を回答とれば。富之進大ハうこび。やがて長吉を倶し
房州ハ立ろう。彼を草履取ハ召使ひ。武藝を
指南もるハ。えよう好むところあれい。僅二三年のうちハ
くと上達し。高弟の徒とりへも。却て長吉を侮りぐ

そおぼえる。こハ又佐野を左馬へ。つる春。晴ある為合ハうち
負て。面目を失ひ。もう。門人も疎く離れ。
云多出るとあく。富之進ハ座敷を隔て。垣ハ一重を隔ひて
も。通路を断て胡越のごく。若黨中間ハ多るまて。互に
言葉をかハとも禁ぜれば。人ハ弾して左馬を
憎く。富之をひくハ此のごぞ。ゆうえ来富之進ハ風流の公
ゲもあり。そうく鞠るぐ蹴て。遊びを。富之進ゲ弟ある富ハう
とハのあ。日来これを羨ひ。已もゆる遊びをしとおりへも。富之を
これを絆さぐ。門人ハ今ハ十八ヲハて。武藝もいまぐ未熟ある

ふり。技藝ふ公を棄ろ〳〵ゑへ。本業の害とあるべ。ゆゑ鞠を
ろ〳〵ゑ〳〵ろひのろ。ゑれもろのろへ。踏まどとのふふ恐止せぶ。
一日富〳〵進へ出ゑ〳〵〳〵富守あれば。富ゆろまぐゑれふかの鞠を
ろり知。先吉を相張つ。廢ふ立知〳〵。踏〳〵ろろふ。主從その
投ふ陳ゑれいめまとまとまと踏る禍ふ。富ゆ〳〵ぶ踏る鞠剪〳〵。薄
屋敷へ撲地と落ろふ。長吉見ろろ驚ゆ足をろふ〳〵〳〵く
慌忙〳〵も。そのろひあれば。富ゆ〳〵以の外ふ周章〳〵。薄家の
挾野氏とふ。年某ふ和あるふ。ゑれ〳〵ゑへ。戲して。鞠を彼廷へ
蹴おろ〳〵ゑれば。縱ゑ水ろ〳〵も。輙ハ返をまどされべとてこのまふ

捨おろべ。兄貴のくりのゑて。鞠をのふまろろと。同もんも難義
ありざて。行とゑべさとうゑゑ。兄ゑ知。武士ゆも世つふ慰てヤスゆ〳〵。
尾を屈〳〵伏と犬ふハ。宮も撓とてヤセ。ゆ〳〵ろろ狐いろ紙
憤ろのふゑも。それろ〳〵いく〳〵をふも賠〳〵。鞠をろけ〳〵ろ踏る
へ〳〵。ゆふ安〳〵おぼ〳〵ゆ〳〵へとのひつ。一刀蹄てゑ〳〵ゑつが蹴へ
走りゆゑ。言葉細ふ。礼義を厚して。絆の鞠をぞ求ろ。見
より先ろ〳〵ろつハ。庭まとゑ知〳〵。泉水ふ候そめる壮者を
あゞめ居りしふ。ろひもよろ〳〵ぶ一ゆの鞠。堺の塀を乗こ〳〵。
百會のめろりへ撞と落まハ。ゑゑ怒りてその鞠と踏洪〳〵。

ちゞし隣のうとを白眼つゝ。とゝようやいひうけん。彼が賠をや
まくんとどさゐくうさゐそ。下郎持手。ぞ吉ゐはとを
そり次て。ちかぐのうととゝふ。ちゝ少もゆへど其奴とゆく
庭はよりゝどり来られと下郎をるゐぞ。持手切戸を押開ぞ吉ぶ
うさゐ先捆ぐ。様頻ちゝ〳〵居ゝり。呵ふちゝ大の眼を瞋し。
汝へ富ゝ進ゞ下郎よゐ。汝がゝの足ふうけゝ。常ふ弄ぶの鞠
をゝうゞ頂ふ蹴つけしうへゝ。弓矢八幡恩ゐゞ。射殺ゐゞうゝ
来ても賠ゐゆう。吹ゞ死ゐん下郎をゆて。鞠を引させよと
いひ来ととそ安ゝ仕どいさゝれゐゝく罵れゝ。ぞ吉須臾

地ふやりゝ。仰悉くは左ふはゆへども。主人い葬ゐゐをちゝも。
下郎めがゐざゐれふ。まの鞠を盗ゆ。過てお庭へ蹴込剥お
歴ゝのお頭へ落うゝ運の畫縦ふゐ討ふゐれゞゝく。
恨ゝふゐねど。出用前の下郎ぐ過ゝつゝ。ゐふも怨めて。
故ゐゝ鞠をゆうゝゝ。世ゝ生ゝのは高恩ゝゐを弾ゐゐひゝふ
ゆゝゝけどちゝふゝ。顧ふ声を振ゐやゐれ下郎侍の頭へ鞠を
蹴ゐゝ。賠ゐゐゐ怨をゝゝ。これやゝ。これい富ゝ進ゞいひつけゝ。これふ恥辱
をゐゝせ。潜ふ奥を催ゐゝおゞ。笑ゐゝせゝといひも於ゝゞ。力
をゝゝと抜ゐゐせゞ。ぞ吉あゐふ死をゝう。衆のて首を到ち

長吉剪鞠
きくけらん
ふ打擲
いとく
賠る

ろへかかるなると。一合ろくも富し進ら下絵。ま人へ一言乃助
ふも及びうんぞ。あるこのまゝふあるまゝとまいといふも便命のそこさ。
笞打擲めそぐ〜てぱら簡ぶ毋ゐるかゝぶ。まむるひい仕ゝを噛
柱手ぐめこゆ〜ろ迫れむと引〜袖を。ふう掛て回答もせざ。
ちぶ左ふめぞ笑ひ。ゆ〜ろもほざんゝら。今との鞠ぶふ返を
あゝぶ。そふゆうふあらふゝふ。そふれく柱手。其奴ら面をたり右りへ
酷ふゝと。承ろと柱手ぐ。ま小ゝゝね傷若ゑ人泥臑酒匹て
踏ゑぜぶ。まぐまゆ〜ろてちぶ左ふ。座下拵穿つ丁と酒ち。
額こす ゆぶれ口。流ろん血と主念の疲。ぶんと。ゆ〜ろ儘氣の壯者。

花川巻之一終